

宮沢賢治における欲望の問題－「貝の火」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, ХАТАНО, Кадзуhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000101

【論文】

宮沢賢治における欲望の問題―「貝の火」をめぐる

秦野 一宏

「私には私の望みや願ひがどんなものやらわからない」

―大正10年7月13日付、関徳弥宛、賢治書簡より

1.

賢治の作品を読んでいると、時に妙に気になる細部に出くわすことがある。たとえば「貝の火」では、栗鼠たちがにわとこの木の陰で「お餅」を食べている場面だ。「そこに若い二匹の栗鼠が、仲よく白いお餅を食べて居りましたがホモイの来たのを見ると、びっくりして立ちあがって急いできもののえりを直し、目を白黒くして餅を飲み込もうとしたりしました¹⁾」。兎のホモイたちが、白い草の根や青いばらの実、鈴蘭の実など、自然のものを食べているのに、いったいどうして、栗鼠たちは木の実ではなくお餅を食べているのだろう。どうにも並びが悪い。

栗鼠たちは、一夜にして偉人になってしまった友だちが突然、目の前に現れ、どう対処していいかわからない。そのあわてぶりが、餅をのどに詰まらせるというイメージを生んだのかもしれない。しかし、それだけのために「餅」を栗鼠の食べ物として持ち込むにはリスクが大きすぎる。物語としての整合性を保つには、どうしても兎たちの食生活と栗鼠たちの食生活の差が対比的に意味づけられていなければならない。

たとえば衣服に関していえば、賢治が対比効果を考えていることは明白である。栗鼠はえりのついた「きもの」を着ているが、狐は洋風のスポーティな「半ズボン」をはいている。「風の又三郎」の転校生、高田三郎も「白い半ずぼん」をはいていたが、これは明らかに、着物を着ている村の子どもたちとの差を際立たせるものだろう。栗鼠の着物と狐の半ズボンにも同種の効果がある。狐は旧世界に入り込んだ異物、高田三郎を迎え入れる村の子どもたちの表現を使っていえば、一種の「外国人」なのだ。

あとでも触れることになるが、この物語ではホモイたちの食生活の変化が大きな問題として取り上げられている。草の根や花の実を常食としていたホモイたちは、狐からもらった角パンを食べようになる。ハイカラなパンと伝統的な「白いお餅」は、狐の洋服とホモイ一家や栗鼠たちの「きもの」のように、新しい西洋とこれまでの日本と対比される関係にあるのだ²⁾。さらに言えば、ホモイたちが食べるようになった角パンは、狐が人間から盗んできたものであったが、どうやら、栗鼠の食べる餅もまた狐からもらった盗品である可能性がある。餅は木の実やきのこのような自然の産物ではないのだから。盗森（「狼森と笹森、盗森」）は、栗餅がたまらなく欲しくなって、栗を盗んだが、それは自分の手で栗餅を作ったかっただけにほかならない。餅にする技術が森にあるかどうか、それはさておき、栗餅好きの盗森も、栗を栽培するわけにはいかなかった。栗鼠も、「白いお餅」がいかにおいしくとも、さすがに稲は栽培していないだろう。

ホモイたちはパンを食べる前段階で、鈴蘭の実を天日に干して保存食にして食べている。物語ではホモイ一家の食生活の変化が問題にされているが、その変化はきつと＜獣＞全体に関わるものであろう。だとすれば、お餅を食べている栗鼠の姿は、ホモイたちの食生活の変化を先取りして物語っていると考えられないか。想像力を働かせすぎかもしれないが、狐が盗んだ加工品は角パンだけではなく、また狐から加工品をもらっているのは栗鼠や兎だけではないかもしれない。狐が関わる同種の＜物語＞が他にもあってもおかしくない。そう考えると、狐がホモイに角パンを勧める時の次のような言葉も気になってくる。「さあおあがりなさい。これは天国のてんぷらといふものです。最上等の所です」。この狐の言葉は、「てんぷら」という極上の品があることを、ホモイがすでに知っていたことを示している。ホモイだけではない。このおいしい「てんぷら」の話は、たくさんの獣たちにも知られていたのだろう。そして、この「天国のてんぷら」になぞらえる食べ物角パンに限定されないとすれば、どうだろう。これまでとは違ったおいしさを誇る加工品が、狐を介して、麻薬のように動物たちの間にはびこっているとすれば……。そうすると、見返りに、狐の悪事（盗みと肉食）もすでに容認されている可能性がある。あるいは、自然そ

のものの本性が、目覚めた欲望によって崩壊しはじめていると見ることもできよう。—説明抜きの気になる細部は、このように読者の想像力を刺激し、物語の時空にさまざまなく広がりをもたせる。今、食べ物だけを例にとったが、この＜広がり＞という面で何より重要なのは、食欲と並行してあぶりだされる権力欲である。

欲望—わけても権力欲—の問題が集中するのはホモイである。兎の子ホモイは溺れかけたひばりの子を助けたお礼にと、鳥の王から貝の火という宝珠を授かった。この貝の火がホモイの欲望と深く係わっていることは言を俟たない。あれこれの「貝の火」論を見ると、たいていこの物語のあらすじを、無欲で、献身的であつたホモイが、貝の火という宝珠を得て慢心を起こす話だと捉えている。ホモイが慢心するにいたつたことは明らかであるとしても、はたしてホモイは貝の火を手にする以前は無欲な子どもであつたのかどうか。たしかに、川でおぼれかけたひばりの子を必死になつて助けたという点からみれば、ホモイは献身的で勇氣ある強い子であつたと言つていいのかもしれない³⁾。ただホモイはひばりの子を助ける時に、相手の醜さにひるんでいる。ひるみながらも、溺れた子を放さなかつた点では称賛に値するが、一方でホモイは、ひばりの子を助けたあともトカゲを想わせるその容貌の怖さにおびえ、そそくさと家に逃げ帰るのである。となればホモイの行為は、非の打ちどころがない＜純粹な＞行為とまでは言えないことになる。

ひばりの母親は、子どもを救ってもらつたお礼として、鳥の王から託された宝珠をホモイに手渡そうとするが、ホモイは「僕はこんなものいりませんよ」と、「笑つて」断る。この言葉にホモイの無欲を読みとる評者もある⁴⁾が、しかし、はじめて見た宝珠への執着心が見られなかつたからといって、ホモイが欲望というものに無縁であつたという証しにはなるまい。要は、この段階では、玉の中で赤い火がちらちら燃えてきれいだなという程度で、それ以上の関心がなかつたというだけのことだ。

ホモイは貝の火を手にしたその日、両親から、同じ宝珠を贈られた鷲の大臣の話を開かされた。まず母親が、大噴火があつて大臣が鳥の避難のためにあちこち指図して歩いている時、玉は「山程ある石」に打たれたり、

まっ赤な熔岩に流されたりしたけれども、傷も曇りもつかないで「却って前より美しくなった」という伝説を聞かせる。父親は、これまで貝の火を持ち続けられたのは今まで「鳥に二人魚に一人」あっただけだと、玉を保持することの稀なることを教え、その光をなくさないようにと忠告し、「お前もきつと鷲の大臣のやうな名高い人になるだらう」と、予言めいたことを口にする。そして「名高い人」になるためには、「よく意地悪なんかしないやうに気を付けないといけないぞ」と釘を刺す。それに対して、ホモイはこう答える。「大丈夫だよ。僕なんかきつと立派にやるよ。玉は僕持って寝るんだから下さい」。—この「きつと立派にやる」という誓いの言葉は、ホモイが、親の期待に応えようとする、すなおなくよい子>の心性をもっていることを物語っている。

「こんなもの」はいらないと言っていたホモイが、玉を持って寝たいとまで思うようになったのは、純粋に、父母が話してくれた鷲の大臣の話に感銘を受けたからである。玉を保持するには、相当の努力がいるということ、さらにはずっと保持できれば、将来、鷲の大臣のような伝説的英雄になれる、というわくわくするような思いが、幼い子どもの向上心に火をつけた。「大丈夫だよ」と安請け合いをするのは、未来に待ち受ける試練がどんなものか、まるで想像できないからだろう。その晩にホモイの見た夢は「黄や緑の火が空で燃えたり、野原が一面黄金の草に変わったり」と、じつに「奇麗な」ものであった。その夢には「銀色のマントをきらきら波立てゝ」野原を見回っている「仁義をそなへた」鷲の大臣が登場するが、ホモイはその美しく雄々しい姿に、自分の未来の姿を重ねているのであろう。夢の中でホモイは嬉しくなっても、何度か、「ホウ。やってるぞ、やってるぞ」と声をあげる。この無邪気な夢からは権力欲など、微塵も感じられない。

貝の火をもらった翌日、ホモイは目をさますと、まず玉を見る。玉は昨夜よりさらに美しくなっている。「見える、見える。あそこが噴火口だ。そら火をふいた。ふいたぞ。面白いな。まるで花火だ」。この段階ではホモイはまだ、燃える美しい「火」と自身を関係づけることはない。玉は、「兎の遠眼鏡」が入っていた「瑪瑙の箱」にしまいこまれるが、この入れ替えは、一家の宝物が「兎の遠眼鏡」から貝の火へ移ったことを示している。その

後、ホモイが野原に出てゆくと、世界が一変している。貝の火が贈られたという話は英雄譚、最高の美談としてあつという間に広がっていたのだ。その噂の伝播のはやいこと。まず、ホモイは年とった野馬から馬鹿丁寧な祝福をうける。「あなたはホモイさまでござりますか。こんど貝の火がお前さまに参られましたさうで実に祝着に存じます。あの玉がこの前獣^{けもの}の方に参りましてからもう千二百年たつてゐると申します。いや、実に私めも今朝そのおはなしを承はりまして、涙を流してござります」。馬はそう言つて泣きだし、別れ際には、「あなた様は私共の恩人でございます。どうかくれぐれもおからだをだいじになされて下されませ」と言い残して去つた。野馬は貝の火の話を聞き込むと、その足で家を出て＜ホモイ＞詣でにやってきたのだろう。初対面である野馬のなじみのない言葉遣いに、ホモイは面食らつたにちがいない。難解な言い回しと、その極端なへりくだりの調子のせいで、野馬が何を言っているのかよくわからない。相手の涙に「ついつりこまれて」もらい泣きをしかけるが、これは、彼の性格の善良さだけではなく、彼に偉くなったのだという意識がまるでないことを示すものである。それでも何かしら、自分が祭り上げられている気配だけは感じられたのだろう、「何だか嬉しいやうなおかしいやうな氣」がしてくる。

ホモイの友だちの栗鼠の反応は、野馬とは少し違う。ホモイがいつものように、お早うと挨拶しても、彼らは何も言葉を返してくれない。あわてて、「りすさん。今日も一緒にどこか遊びに行きませんか」と誘いをかけると、栗鼠たちは「飛んでもないと云ふやうに目をまん^{まろ}にして顔を見合せて、それからいきなり向ふを向いて一生けん命逃げて行つてしま」つた。栗鼠たちは急に偉くなつてしまった友だちに対して、どう振る舞つていいか、戸惑っているだけなのだが、ホモイにはそのことがわからない。無邪気で、世間ずれしていないホモイは自分に与えられた＜名誉ある地位＞が理解できず、仲間外れにされたと勘違いし、そのことを母親にこぼす。母親は栗鼠の態度の変化を笑いながら、こう説明する。「お前はもう立派な人になったんだから、りすなんか恥しいのです。ですからよく氣をつけてあとで笑はれないやうにするんですよ」。ここでの「お前はもう立派な人になったんだから」という母親の言葉は、「お前もきっと鷲の大臣のやうな名高

い人になるだらう」という前日の父親の言葉と対をなしている。父親が未来に起こるものとして語ったことを、母親はすでに起こってしまったこととして語った。この差は大きい。「立派にやるよ」と言っていたホモイが何ら精進することもなく一夜にして、「立派な人になつて」しまったのだから。立派な人をめざして仲間に意地悪をしないように励むはずであったのが、今やホモイは、仲間の前で、立派な人であり続けなければならなくなった。

立派な人の前では恥ずかしくなるというのも、他人（あるいは世間）に笑われたくないというのも、我々日本人になじんだ感覚である。そういえば、「カイロ団長」に出てくるとのさまがえるの友人に、賢治はこんなことを言わせている。「とにかく大いに盛んにやらないといかんね。さうでないと笑ひものになってしまうだけだ」。力を得たものは現状維持ではなく、「大いに盛んに」やらなければ、笑われるというのだ。この伝でゆくと、貝の火を得たホモイも、笑われないように、より立派に自分を見せつけなければならないということになる。

＜よい子＞のホモイは、笑われないようにとの母親の忠告を自分なりに、守ろうとするのであるが、具体的に何をすればいいのか、わからない。だから、母親たちが感じている＜立派さ＞がどういうものか、自分のよく知っている言葉に置き換えて、探りを入れる。「おっかさん。それ〔笑われないようにすること〕は大丈夫ですよ。そんなら僕はもう大将になったんですか」。「立派な人」はホモイにとって抽象的で曖昧模糊としたものだが、「大将」となると俄然、具体的にイメージできるものとなる。

「貝の火」は大正 10 年頃の作とされているが、どうやら当時子どもたちにとって大将のイメージは強烈だったのだろう。有島生馬の「大将の子と巡査の子」（大正 7 年）では、大将の子の武雄が、自身の父はたくさん勲章をもっているからえらいと自慢する。小川未明の「強い大将の話」（大正 9 年）では、「家来」を引き連れていばって歩く「名誉ある」大将を主人公に据え付けられている。賢治の童話「さるのこしかけ」（大正 10 年頃）では、樵夫のもとに小さな猿の大将が二匹の「家来」を引き連れて現れ、横柄な口を叩いたり、自分は「陸軍大将」なんだと威張ったりする。また「月夜のでんしんばしら」（初稿は大正 10 年 9 月）では、その強くえ

らい<大将像>は子どもの憧れの的として描き出されていた。ここでは「電気総長」が、総長という言葉の意味が分からぬ恭一に、「電気のすべての長、長といふのはかしらとよむ。とりもなほさず電気の大将といふことだ」と嘯み砕いて説明すると、恭一は、「大将ならずもふんおもしろいでせう」と、「大将」という言葉に食いついてきた。彼はこのひと言で、電気総長のえらさが腑に落ちたのである。恭一の心をつかんだ電気総長は、大将であることのおもしろさをこう解説する。「はつはつは、面白いさ。それ、その工兵も、その竜騎兵も、向ふのてき弾兵も、みんなおれの兵隊だからな」。そしてそのあとには、前を通る一本のでんしんばしらに、よそ見をするなど、これみよがしに「どなり」つける。日清・日露の戦争、あるいはシベリア出兵（大正7年-11年）の影響があったのか、どうやら、大将は当時の子どもの目には、何でも自在にできる、一種憧れの英雄のようなものとして映っていたらしい。

さて、「そんなら僕はもう大将になったんですか」というホモイの問いかけに、母親は親バカぶりを発揮して「嬉しさうに」、つい、「まあさうです」と言ってしまった。子どもが大将のえらさを、どれほど過大に考えるかなんて考えもしなかったのだ。この答えが取り返しのつかないくらい事態を深刻にすることに、母親はまるで気がついていない。ホモイは母親の言葉に、「うまいぞ。うまいぞ。もうみんな僕のでしたなんだ。狐なんかもうこわくも何ともないや」と喜んで踊りあがる。そして母親相手にもう、栗鼠を少将にするだの、馬を大佐にするだのと言いだした。すると、母親は息子の考えが幼く、微笑ましいものだと感じて、笑いながら、「さうだね、けれどもあんまりいばるんじゃありませんよ」と、やさしく言い聞かせた。「さうだね」という甘い相槌の持つ意味は大きい。母親はホモイが大将として振舞うことを黙認したのだ。「さうだね」のあとでは、「あんまり」威張らないようにという忠告も、ホモイの耳には、<ちょっとぐらい>は威張ってもいいと響く。そしてその<ちょっと>の度合いはもう、ホモイの主観に任されている。こうして、御礼として受けとったはずの美しい宝珠は、大将が誇りとするきらびやかな勲章になってしまった。

しかしいくら「大将」になったからといって、<よい子>をやめるわけ

にはゆかない。次の日、ホモイは母親に鈴蘭の実を集めてくるように言いつけられ、箒をもって野原に出るが、その時のひとりごとの中に、彼の葛藤がにじみ出ている。「ふん、大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや。誰かにみつけれたらきつと笑はれるばかりだ」。ホモイはよい子らしく、言いつけを守りながら、笑われないよう、大将の体面をつくろう妙案を考えついた。つまりは、部下に命令し、鈴蘭の実を集めさせればよいのだ。ホモイはすぐさま居合わせたむぐらを軍曹に任命し、実を集めさせようとする。しかし、むぐらは、長くお日様を見ると死んでしまいますからと、それを断る。ホモイの感覚からすれば、理由はどうあれ、大将の命令に従わないのはけしからんことだ。「今に狐が来たらお前たちの仲間をみんなひどいめにあはしてやるよ」。むぐらたちは仲間一人の命令違反のために、連帯責任をとらされることになる。

結局、鈴蘭の実の蒐集は、少将の栗鼠たちが引き受けてくれることになった。栗鼠たちは夕方までに大量の実を集め、それを大騒ぎしてホモイの家に運びこむ。その光景を見て驚く母親に、ホモイは大いばりでこう言うてのけた。「おっかさん。ぼくの腕前をごらん。まだまだ僕はどんなことでもできるんですよ」。この万能感はそのまま、「てした」を使ってもっといろんなことをやりたいというむずむずする欲望に変わる。ただこの場面では、父親にむぐらをおどしたことを叱りつけられ、ホモイは、栗鼠たちの前で大将としての恥をかき、面目を失ってしまう。その日の貝の火が一昨日の晩より「もっと赤くもっと速く燃えてゐた」ことから、気分は変わる。ホモイの涙は乾き、父親の気分も、笑いがこぼれ出るほどに一新された。欲望がまたも頭をもたげてくる。「どんなことでもできる」大将の地位を手放すなんて、ホモイにはもう考えられない。

この貝の火を通して明らかになるホモイの欲望は、無から湧きだしたわけではない。周囲の態度の変化や、母親の黙認が大きく作用したとはいえ、それだけですぐさま欲望が生まれるはずもない。ホモイの心には意識はせずとも、貝の火を受け取る以前から、欲望の虜になる下地はあった。

たとえばホモイの使った「てした」や「けらい」という表現に注意しよう。「てした」や「けらい」といった言葉を彼はいったい誰から聞きこんだ

のか。思うに、これまで「ずみぶん」狐にいじめられてきたホモイは、そうした言葉をすでに実践的に狐との関係を通して学んでいたのではないか。「てした」や「けらい」は力の弱いホモイが狐から割り振られた役どころであった。彼にはまさに、日々の辛い体験があったのだ。「狐なんかもうこわくも何ともないや」とホモイ大将は言うが、貝の火をもらって「大将」となったホモイの願いは、なによりもまず、狐との力の上下の関係を逆転させることにあった。

といっても、狐はホモイにとっては、たちの悪いいじめっ子であるだけではない。みんなと違って「半ズボン」をはいた狐は、ホモイに、家や世間に捕らわれない＜自由人＞のイメージも提供していた。狐はいつも忙しそうに、「一生けん命に」走っている。その走るエネルギーな姿を見て、「狐は毎日何をしてゐるんだらう」とホモイは考えた。何をしているのかもわからないその謎めいた生活はいかにもおもしろそうで、ホモイはそこに、父親にはない、一種自由の香りを嗅ぎ取っていたにちがいない。

問題は、ともにいじめられてきた仲間との関係だ。いじめられる者の気持ちはもちろん、自身の痛みを通して十分わかる。しかし、だからといってホモイは、自分はいじめる側に絶対立たないと誓っていたわけでもない。逆に、いつか、チャンスがめぐってくれば、自分も狐のように他をいじめてみたいと、無意識のうちに思っていたのではないか。悪党である狐も、正義漢である父親と同じく、大きな力をもっている。この力がホモイを魅了する。ホモイにとって大きらいな狐は、父親と並ぶ、憧れのモデルでもあった。

2.

貝の火を受けとる以前もホモイの無意識下には、いろいろ渦巻く感情があった。ただ、作者は時間軸に沿って、その＜感情＞の変化の因果関係を示すことはない。過去は現在の中に嵌めこまれている。貝の火を手にすることで増長したホモイは、本人にすら隠されていた欲望をあらわにすることになる。結果、貝の火を手にした現在を語ることがそのまま、自身の触れたくない過去を語ることもなるのだ。たとえば、「お前はずみぶん僕を

いぢめたな。今度は僕のけらいだぞ」と、ホモイは狐に言った。「今度は」という言葉が効いている。これまでずっと「けらい」として扱われてきたのだ。「けらい」ホモイが、どんないじめを受けていたのかはわからないが、これからホモイと狐が行うむぐらへのいじめから、これまでホモイが受けてきたいじめの＜形＞を透かし見ることができる。

察するに、ホモイは、これまで自分が狐に手ひどくいじめられていることを両親に訴えることができなかった。もしもホモイが意を決して訴えれば、行動派で正義漢の父は黙っていなかっただろう。のちにホモイは狐と、鳥たちを網でとって見世物にする「動物園」遊びを企てるが、それを知ると父親は怒り、ホモイを促して「いのちがけで」狐と決闘させようとする。ホモイが手ひどくいじめられていると父親が知れば、同じようなことが起こったはずだ。父親をよく知るホモイは、そのことを十分に承知していたにちがいない。狐との決闘へむりやり連れだされた時は、父親の傍らでただ泣いていただけだったが、そのみじめな姿は、いじめられていることを父親に訴えたあとの、ありうべき末路でもあった。そんな父親を巻き込む危険を冒さなくとも、楽天的なホモイは、いじめられながらも明るく生きることができた。その楽天性はなにより、彼が執拗に繰り返す「大丈夫だ」という言葉から窺うことができる。貝の火がやってくるまで、ホモイの欲望はこの＜まじないの言葉＞によって抑圧されてきた。

抑圧に関わっているのは狐のいじめだけではない。親の言うことに逆らわない＜よい子＞であること自体が抑圧と深く関わっている。聞き分けのいいよい子であるホモイは、親や共同体から禁止されれば、それをきちんと守るだろう。しかしいくら＜よい子＞を装っていても子どもは子どもで、その奔放さを完全に抑え込むことはできない。禁じられると何かこう、おさまらないものがある。この禁止と抑圧に関連して興味深いのは物語の冒頭、ホモイが川べりで遊んでいる場面だ。「腕を組んでほくほくしながら」、「まるで僕は川の波の上で芸当しているやうだぞ」と言っているのが引つ掛かる。どうやら、川に特別な関心があるらしい。川だけではない、見知らぬ川の向こうも彼の興味をそそる。「この川を向ふへ跳び越えてやらうかな。なあに訳はないさ」とひとりごとを言っではみるが、考えは、何か固

い壁にはねかえされたように、そこで突然止まる。「けれども川の向ふ側は、どうも草が悪いからね」。どうやらホモイは川に入ったり、川を跳び越えてみたりしたくてしょうがないのだが、川に近づくことは父から強く禁止されているのだ。父の命令は<正しく>、よい子として絶対守るべきものなので、ホモイは、川の向こうへ行っても何もいいことはない、草が悪いなどと、父の禁止を合理化しているのであろう。おそらくは、そのような父の禁止が、狐から受けたいじめの記憶と同じように、ホモイの無意識部の中へ抑え込まれている。よい子であろうとするホモイ自身にとって、父親は憧れる存在であると同時に、一種、禁止の権化である煙たい存在でもあった。

抑圧は禁止だけでなく、期待とも関わっている。父親は父親らしく、ホモイが正義感溢れる善人になって欲しいと願っている。と同時に、貝の火を授かった時の反応から推して、正義漢、善人としてホモイの名が世間に聞こえるようになることも、強く期待している。息子が「名高い人」になれば、親としても鼻が高いのだろうが、そのような過剰な期待は、息子からすれば、うれしい反面、のしかかる重圧にもなる。

父親がもっとも重要視するのは世間における一家の面目である。実際、鳥の王から授かった貝の火を曇らせてしまった時には、彼は鳥たちを前にこうわびた。「私共は面目次第もございません」。その後、父親は鳥たちを家の中へと案内し、ただの白い石になってしまった貝の火をみなに見せ、「どうか沢山笑ってやって下さい」と、なにか媚を売るような、自分で自分を貶める言葉を吐く。「私共は面目次第もございません」は、「あなた様は私共の恩人でございます」という、すでに触れた野馬の言葉を、「笑ってやって下さい」は、「あとで笑はれないやうに」という母親のホモイへの忠告をそれぞれ想起させる。貝の火が家の外へ飛び去ってしまうと、鳥たちはみな興ざめて去ってゆくが、梟だけは最後まで残って、「たった六日だったな。ホッホ」と、棘ある言葉でホモイが貝の火を保持しえなかったことを揶揄する。どうやら面目を重視するのは、ホモイの父だけではないらしい。

そもそも、互いに顔見知りの関係にもない野馬が、ホモイの名誉を誇り

に思ったり、仲間の命をホモイに救われ、自分の命も父兎に助けてもらった梟が、ホモイ一家の不名誉を笑ったりするのは、奇妙なことである。野馬にとっても父親にとっても、はたまた梟にとっても、貝の火をめぐる名誉は、ホモイ一個人のものではなかったのだ。野馬や梟は、ひばりの子の救出そのものを問題にしているのではない。極端なことを言えば、野馬や梟にとってはひばりの子を助けたという事実など、どうでもいいのだ。魚、鳥、獣と分化した生き物の集団がそのえらさを競い合うなか、老いた野馬にとって大事なのは、自分と同じ獣集団に属する者に、貝の火という有名な宝珠がやってきたことだけだった。また、梟にとっては、鳥類に属さないホモイが貝の火を得たことがよほど悔しかったのだろう。集団の一員としての所属意識が彼らを突き動かすのだ。同じような所属意識に類するものがホモイの両親にもある。ホモイを巻き込む強い一家意識である。両親はさすがに、ひばりの子の救出と貝の火を完全に切り離せないだろうが、重要なのは家という集団である。身を立て、家のために励めという父親の教育方針が、幼いホモイにも染みわたっていた。たとえば、貝の火が授けられた次の日の朝、母親から、玉を見てもいいかと聞かれた時に、ホモイはこう答えている。「いいとも。これはうちの宝物なんだから、おっかさんのだよ」。ホモイも、個人的な名誉は同時に、家に与えられた名誉だと感じているのである。おそらく貝の火を授けられる以前から、ホモイは、世間（野馬や梟がその代表だ！）に認められる立派な兎になってほしいという期待を背負わされていたのだ。

一家の大黒柱である父親はたしかに正義漢で、どっしりとした分別盛りの者のもつ落ち着きさえ漂わせている⁵⁾が、彼の正義もやはり、世間の上に打ちたてられている。その基盤は揺るぎないものではない。貝の火という超越的なものが介入してくると、自信もゆらぐ。貝の火は何かしら、なされた行為の正邪を測る新たな装置のようなものになる。芥川龍之介は「MENSURA ZOILI」（大正5年）という小説の中で、絵や小説の芸術的価値を測定する価値判定器なるものを取り上げているが、貝の火も、ホモイの父親にとっては、その変容で行為の正邪を見分ける＜測定器＞だったのかもしれない。「MENSURA ZOILI」では、登場人物の一人が、測定器

の評価が確かだということはどのように決めるのかという根本的な疑問を投げかける。貝の火の下す<評価>にも、同じような疑問が湧き上がる。そこに何か超越的なものが介在しているとしても、評価をどう読みとるか。「ゾイリアの価値測定器」では結果は、明白に数字で現れるが、貝の火では、玉が見せるものをさらに解釈しなければならない。傷や曇りはわかりやすいが、美しいというのは個人の感覚によって異なることもある。

千葉一幹は、貝の火の超越性を「一神教の神の示す超越性と類比できるもの」とした⁶⁾が、忘れてはならないのは、その「超越性」は世間によって解釈されるということだ。玉は時に傷や曇りがつき、時に<美しくなる>。これが事実であるが、伝説（流布した<世間>の解釈）では、悪しきことをすれば、玉は曇ったり、傷がついたりし、善行に励んでいるのであれば、玉は「山程ある石」に打たれようと、熔岩に流されようと傷も曇りもつかず、「却って前より美しく」なる。父親はさらに、論理を逆転させて、玉に傷や曇りがなく、美しく燃えていることが、悪行の行なわれていない^{しるし}徴であると見なした。この<徴>が、父親の考える貝の火の<判断>である。これまででなじんできた<善悪>観と、新たに受け入れた貝の火の<判断>が食い違う場合は、貝の火の<判断>を優先させることとなる。この信念の変更を如実に示しているのが、ホモイの角パン持ち帰り事件である。

父親はホモイのもってきた角パンを、狐が盗んできたものだと言破し、怒り、パンを踏みじめる。もちろん、ホモイはそれが盗品と知らなかったわけで、彼に非があるわけではない。むしろ、その事情を聞こうともせず怒り狂う父親のほうがおとなげない。ただ事件そのものは、貝の火がまったくこの事実を否定するような兆候を示さないの、まるで何事もなかったかのように終わってしまう。「お父さんは玉をホモイに渡してしまっていました。ホモイも玉を見ていつか涙を忘れてしまひました」。父親の判定はもはやあてにならない、玉の<判断>がすべてだ。—こうして盗みさえも、悪事でなくなるという珍妙な事態が出来することになる。おそらく、貝の火にまつわる伝説が世間に広がっていなければ、玉の色がどう変わろうと、父親もそのことに振り回されることはなかっただろう。あるいは、盗みは悪だという彼のこれまでの認識も絶対的なものではなく、ただ世間

に準拠していただけてあったのかもしれない。

となると、どうだろう。あるのは世間だけで、絶対的な真理などというものはないということになるのだろうか。いや、賢治自身は無意識を信じ、「心の深部に於て万人共通する」ものがあると考えていた（『注文の多い料理店』広告文）。「心の深部」とは無意識を指すのだろう。無意識界は自身の方でどうしようもないものだが、どうやら賢治は、その人間には手の届かない世界に仏や菩薩が深く関わっていると考えていたのだ⁷⁾。この無意識界は、「貝の火」では、夢として現れる。ホモイは貝の火を授かった日は憧れの鷲の大臣の夢を見、狐に盗みはいけないと宣言した次の日も「美しい」夢を見た。ところが狐といっしょにむぐらをいじめた夜、ホモイの夢は突然、ぶきみなものになる。それは「高い高い錐のやうな山の頂上に片脚で立ってゐる」夢で、彼は「びっくりして泣いて目をさまし」たが、一向に反省する気配はない。無意識部ではもう、ぎりぎり罪の意識に追い詰められているのだが、ホモイは貝の火の＜美しさ＞にかまけ、内なる＜景色＞を自身のものとして受け入れることができなかった⁸⁾。ホモイの良心は欲望に流されてしまったのだ。その欲望を後押しするのが狐である。

ホモイは父親や世間に着せられた拘束衣を脱ぎ捨て、心ゆくまでおもしろいことをやってみたいのだが、それを抑え込んでいた。その抑圧の機制を解除しようとするのが狐だ。狐には野馬にとっての獣、ホモイの父にとっての家のような、「私共」と称する所属集団がない。狐は世間の＜共通認識＝常識＞からはみだしていて、どうやら恥という意識も希薄のようだ。縛るものも背負うものもない、欲望の赴くままに行動するプリンスの個だからこそ、狐はいわば、トリックスターのように、自由気儘に動き、世間的な価値をひっくり返すことができるのである。

狐は＜パンと見世物＞によって幼いホモイを誘惑する。ここでいう＜パン＞とはおいしい角パンそのもので、＜見世物＞とは娯楽あるいはショーとしてのむぐらいじめや「動物園」の見物を指す。まずは＜パン＞から見てゆこう。狐がホモイに角パンをもってくるのは、彼を手なずけるためであるが、ホモイが狐から角パンをもらうのは、食べてみたらおいしかったということもあろうが、両親においしいものを食べさせてやりたいという、

やさしい心根と結びついている。「ホモイはそれをおうちに持って行ってお父さんやお母さんにあげる時の事を考へて居ました。／お父さんだって、こんなおいしいものは知らないだらう。僕はほんたうに孝行だなあ」。自分のことを孝行息子だと意識する、一種むずむずするようなよい子特有の自己肯定である。ただし、この甘い自己肯定には代償がいる。角パンの獲得には、狐が鶏をつかまえるのを黙認するという交換条件が付いていた。「そのかわり私の鶏をとるのを、あなたがとめてはいけませんよ」。角パンが「ダアイドコロといふ木」になるという狐の言葉を信じたのは、無知ですまされるのかもしれない。しかし、鶏を「とる」(＝盗る)のを黙認するのが、悪事に加担することであることは、ホモイにもわかっていたはずだ。実際、二日前には、「少しとうもろこしを盗んで参りませうか」という狐の誘いかけを、「そんなことはしてはならん」と突っぱねていたのだ。ところが今回の申し出に対しては即座に、「いゝとも」とゴーサインを出している。鶏を「とる」のが、鶏を食うことにつながるとまで思いが至らなかったにせよ、その言葉の軽さは異様である。今回は、頭でわかっている、もう自身の欲望に打ち勝てなくなっているのだ。

狐はホモイの性格、心理を巧みに読んで誘惑し、あれやこれやと唆す。ホモイが好きなのはおいしいものだけではない。それ以上に、彼は遊ぶこと、おもしろいことが大好きだった。貝の石を贈られた次の日には、玉の変容を火山や花火に見立てては、「面白いな」と、ひとり浮かれている。また冒頭部分では、ピョンピョンはねる自身の姿を、川の波の上の姿に見立てて遊んでいる。「まるで僕は川の波の上で芸当をしてゐるやうだぞ」。この言葉は唐突ながら、ホモイらしさが存分に出ていて興味深い。川べりで楽しく打ち興じていたホモイは、狐に唆され、むぐらいじめに加担しているホモイとは別人の観を呈する。ただ、ただどちらも、＜面白いな＞と、はしゃいでいることに変わりはない。

ホモイの感覚ではすべては遊びの世界での出来事、ごっこの世界での出来事であった。この本来、無邪気なはずの＜ごっこ＞遊びが、絶大な貝の火効果と、ホモイが少尉に＜任命した＞狡猾な狐の介入で、現実の残忍な出来事としての色合いを帯びてくる。狐は、「何か面白いことをしやうちゃ

ありませんか」、「今日は一つうんと面白いことをやりませう」と誘いかけてくるが、その「何か面白いこと」とはむぐらいじめで、「うんと面白いこと」とは「動物園」ごっこであった。どちらも、弱い者たちを〈見世物〉にして楽しもうという点では変わりはない。むぐらをいじめることには、奴らは野原の毒虫だからという理由づけと、あなたは手を汚すことはないという罪の軽減へのほのめかしが必要であったが、「動物園」遊びにはもうそんな言訳すら必要はない。「動物園をあなたは嫌ひですか」と、消極的に誘いかけるだけでいい。もはやホモイには、湧き上がってくる欲望を抑えるだけの力はない。とんぼや蜂や雀、かけすなど、網で捕まえられたさまざまな生き物が檻の中でずらりと立ち並ぶ、その動物園の「景色」を想像して、ホモイは「たまらなく面白くな」る。こうして狐は、ホモイの隠された欲望を巧みに誘い出し、最終的には歯止めの効かないものにしてしまうのである。

ホモイが狐の誘惑に負け、自身の欲望に呑みこまれるのは、父親の判断が間違いだと確信する時だ。これまで絶対の命令と信じてきた父の言葉は、〈戒律〉などではなく、単なる世間の常識にすぎなかった。より高度なく判断〉が下されると、これまでの常識は、いとも簡単に否定されてしまった。ホモイはその父親の変わりようを目の当たりにして、無邪気な心で、父親の権威も絶対的なものではないと感じとったのではないか⁹⁾。よい子の心の拘束衣はここで脱ぎ捨てられる。

ホモイは玉の〈判断〉に従い、すでに盗んだものとわかっている角パンを次の日も、律儀に三つ、狐からもらってきて、平然と家の戸棚に入れる。もう確信犯である。父親も母親も、ホモイの読みどおり、その角パンを無言で受け入れる。盗んだものは食べないと父親が啖呵をきったのはつい昨日のことだ。にもかかわらず、ホモイも母親も意識してそのことに触れず、父親も、「狐には気をつけないといけないぞ」と間の抜けた忠告をしながら、まるで何事もなかったかのように盗品の角パンを食べている¹⁰⁾。

家族そろって角パンを食し、団欒を楽しんだ日は、狐といっしょに、ホモイがむぐらをいじめた日でもある。弱者がいじめられる現場を見てみたいという思いがあったのか、ホモイは^大将として、少尉（狐）が軍曹（「毒

虫」のむぐらたち)を「少し」いじめることを許可した。大将の命を奉じた狐は、大きな石を起こし、「かたまつてぶるぶるふるへて」いた親子のむぐらたちを見つけると、「さあ、走れ、走らないと、噛み殺すぞ」と言って足をどんどん鳴らす。むぐらの親子は、「ごめんください。ごめんください」と言いながら逃げまどうのだが、みんな目が見えない上に足がきかないので、ただ草を搔くだけだ。「一番小さな子」が仰向けになって気絶したようになると、狐は歯噛みをする。すると、ただ見ていただけのはずだったホモイも「思はず」、「シッシッ」と言って足を鳴らす。ホモイはこれまで狐に「ずるぶん」いじめられてきたので、いじめられる辛さはよく知っている。前々日には、むぐらを脅したことで父親に強く叱責され、反省もした。にもかかわらず、かつて味わったはずの狐のいじめを黙認するだけでなく、あろうことか、知らない間に自身もむぐらを使ったレース遊びを楽しんでいる。

このむぐらいじめは、前日の貝の火の＜判断＞が、大きく影響している。ホモイが盗んだ角パンをもらってきても、玉は砕けるどころか、「お日さまの光を受けてまるで天上に昇って行きさうに美しく燃え」た。それを見て、ホモイの父は、盗みが咎められないのであれば、たいていのことは許されると思ったにちがいない。この父の考えは母親にも伝染し、＜判断＞の出した翌日には角パンはもう、ホモイ一家の食卓に並べられることになる。よい子のホモイは、父母の考えに同調するだけでなく、より過激な結論に達する。みなで角パンを食べている時に、ホモイは母親にしたり顔で言った。「僕はね、うまれつきあの貝の火と離れないやうになってゐるんですよ。たとへ僕がどんな事をしたうてあの貝の火がどこかへ飛んで行くなんでそんな事があるもんですか」。貝の火がホモイの意思を分かち持つ分身のようなものであるならば、彼はもう何をやっても許されることになる。ラスコーニコフ(『罪と罰』)の超人宣言を思わせるこの恐ろしい、横柄な言葉を聞きながら、父親は、「実際さうだといゝがな」と、奥歯に物が挟まったような口ぶりで、しらじらしく傍観者を決め込む。これまで貝の火が示してきた＜判断＞を信じる彼は、ホモイの思い上がりを叱責できないのだ。

3.

ホモイは父親の黙認のもと、狐の力を借りて、大将ごっこを続ける。狐はただ唆すことを楽しんでいるわけではない。ホモイが遊びと信じていたものはどれも、狐にとっては遊び以上のものであった。狐は、貝の火を手に入れたために生まれたホモイの威光を、自分のために利用しようとする。ホモイにとって動物園遊びとは見て楽しむもの、しかも「たまたまなく」面白いものであったが、狐にとっては、動物の見世物など、さして面白いものではなかった。「とんぼ、蜂、雀、かけすでも、もっと大きなやつでもひっかかりますぜ」と狐は言うが、狐の食料にならないとんぼや蜂への言及は、明らかにホモイの目をくらすためのものである。実際、捕らえられたのは狐の好物の鳥ばかりだ。「動物園」ごっことは、グルメで大食漢である狐の食欲を満たす最上の方法であったのだ。ホモイが狐に必要なだったのは、ホモイ大将が黙認しているという触れ込みのもと、誰にも邪魔されることなく、おいしい大量の鳥を捕獲できると見込まれたからである。狐から角パンを受け取った日、「狐はいったい毎日何をしているんだらう」とホモイは素朴な疑問をおぼえたが、その明確な生々しい答えを、「動物園」ごっこの最後で得ることになる。

けれどもホモイの顔を見ると、みんな急に安心したやうに静まりました。

鶯が硝子越しに申しました。

「ホモイさん。どうかあなたのお力で助けてやって下さい。私らは狐につかまったのです。あしたはきつと食はれます。お願いでございます。ホモイさん。」(①) ホモイはすぐ箱を開かうとしました。(②)

すると、狐が額に黒い皺をよせて、眼を釣りあげてどなりました。

「ホモイ。気をつけろ。その箱に手でもかけてみる。食ひ殺すぞ。泥棒め。」

まるで口が横に裂けさうです。

ホモイは怖くなってしまつて、一目散におうちへ帰りました。今日はおっかさんも野原に出て、うちに居ませんでした。

ホモイはあまり胸がドキドキするのであの貝の火を見ようと函を出して蓋を開きました。

助けてほしいと懇願されても、ホモイはひと言も言葉を発しない。状況はひばりの子を助けた時とよく似ている。①の懇願による非常事態の了解と②の救済行為の間にまったく、間（^ま逡巡）がないことに注意したい。ホモイは狐がどう思うか、まったく忖度することなく、まるで条件反射のように、咄嗟に箱を開けようとする（その反応はひばりの子が流れてきた時の、「いきなり」水の中に飛び込むという行動を想起させる）。しかしホモイが箱を開けようとしたその瞬間、狐が怖ろしい形相で、手をかけるな、食い殺すぞとどなる。ホモイは恐怖で、大将ぶりを発揮することもできない。愉快なくごっこ>の世界は一瞬で消え失せた。その恐怖は、溺れかけたひばりの子が、とかげに似た醜さに気づいた時の怖ろしさに比べられよう。ひばりの子の場合は、なんとかその怖さを持ちこたえることができた。しかし今回の怖さはそれ以上である。捕まったたくさんの鳥たちのことを置き去りにして、ホモイは「いちもくさんに」「おうち」へ帰る。ひばりの子を助けたあとは、「いちもくさんにおとうさんのお家へ走って帰った。西村真由美は、このホモイの帰る「お家」が「おとうさんの」と形容されていることは「非常に特徴的である」と指摘している¹¹⁾が、それ以上に特徴的なのは、今回ホモイが尻尾を巻いて帰る「お家」には「おとうさんの」という形容語がないことだ。お父さんは、もはや支えにならない。ホモイが逃げ帰るのは、単なる「おうち」、強いて言えば、貝の火の支配する「おうち」である。「胸がドキドキする」のは怖いせいもあるが、そこには、自分が臆病にも、鳥たちを見棄てたという良心の咎めが深く係わっている。ホモイは、この心に突き刺さった咎めのとげを貝の火に抜いてもらおうと考えたのだ。現実を直視したくない彼は、もう自分の目を信じない。彼の目はもう、何も見る必要がない……。彼は貝の火による事実の評価、解釈によって事実から逃げようとしたのである。

このホモイの頼ろうとする貝の火は、童話「みぢかい木ぺん」でキッコ

がもらふふしぎな木ペンを想起させる。内気なキッコは遊び仲間に加われず、いつも一人で、「にかにか笑ひながら」木ペンで字を書く一人遊びをしていた。ところがある時、慶助にからかわれ、唯一の遊び道具である木ペンをとられてしまう。そしてその日、泣いて帰る途中で、見知らぬおじいさんから魔法の木ペンをもらった。このふしぎな木ペンのおかげでキッコは、努力もせずに勉強ができるようになり、みんなから褒められ、尊敬されるようになる。すると、彼は豹変し、度外れに威張りだす。学校へ出る時はもう、村中の子どもたちを待たせて置く。学校から帰っていっしょに山へ遊びに行く時には、みんなを強要し、「うちの都合や何かで」行かなかった者は、見せしめのためにみんなに殴らせる。自分の思い通りに動かない者は、どんな事情があろうと許さない。キッコもホモイも結局、周囲の＜よい評価＞に振り回されていたのだ。

転がりこんできたものは、また転がり去る。「みぢかい木ペン」は、キッコが魔法の木ペンをなくし、算術が解けなくなってしまうところで、途切れている。あるいは慢心したキッコにも、何か重大な厄災が襲いかかることになっていたのだろうか。その種の結末を予想する読者はきっと多いはずだ。そうした読者が予測するのは因果応報、改心をせまる罰である。ただそのように予測しつつ、牛山恵のように、そんな罰は、キッコのように「弱い者」にとっては「厳しすぎる制裁」ではないかと、ありうべき展開に疑義を唱える評者もある¹²⁾。同じようなことが、ホモイの失明に関してもくり返し、言われてきた。ホモイの場合、問題になるのはその幼さ、無邪気さと失明をめぐる父親の慰めの言葉である。ホモイの目が見えなくなったあと父親は腕を組んでじっと考えていたが、やがてホモイのせなかを静かにたたいて、こう慰めた。「泣くな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかったお前は、いちばんさいはひなのだ」。矢野智司の指摘するように、この言葉を正しいと受け取れば、この物語は「教訓話」として落ち着くだろう¹³⁾。しかしこんな教訓臭漂う言葉を、バイアスもかけずに賢治が使うだろうか。あるいは、父親が最愛の息子の失明という事態にうろたえることがないという事実そのものが、＜バイアス＞ではないのか。たとえ教訓話だとしても、失明という辛い体験は、幼いホモイにとって、

あまりにも厳しすぎる「制裁」になってしまっている。こうした罪と罰のバランスがとれないことから矢野は、ホモイの失明は教訓話の材料ではなく、「私たちの慢心という罪ゆえに」失明した「私たちの供犠」であるとの見方をとる¹⁴⁾。

しかしこの解釈では、慢心と失明のつながりがあいまいにならざるをえない。「供犠」と言うなら、ホモイは死んでもいい、不治の病に倒れてもいいということになってしまう。つまり、罰なら何でもいいということになり、失明そのものに特異性がなくなる。

ホモイの失明には、かわいそうだという常識的ヒューマニズムに収まりきらない、何かシンボリックなものがある。暗い洞窟を流れる川や深海には目のない魚が棲む。何も見るものがなければ、自然は目を取り上げてしまう。目の前で起きていることを見ずに＜価値測定器＞にばかり頼るホモイの今の目も、役に立たないものになってしまっていたからこそ、取り上げられた可能性がある。ホモイは貝の火の見せる＜形＞にこだわって自身を取り違えてしまった。一方、物語にはもう一つ、別の形が出てくる。それは、ホモイの心が夢で見せてくれる＜景色＞、錐のような山の頂上に片足で立っている自身の姿だ。ホモイはまさに失明することで、外の形を断念し、自分の内なる形を見るよりほかなくなった。つまり失明は制裁でもなく、供犠でもない、選択されるべき形をより鮮明にするためのシンボリックな表現であつたと考えられるのである。

自分の目で見たものを、自分で評価できれば、それに越したことはない。しかし、そうさせないものが付きまとってくる。一つは、世間である。貝の火が、立派な行いをした時にはその輝きで持ち主を評価するというのは、噂に過ぎない。曇るということはよくないというのはわかるが、だからといって曇っていない状態をいいとみなしていいわけではない。また、貝の火が曇ってしまえば、一晚油に漬けておくのが一番いい「といふ話」も聞こえてくる。ホモイの心をふらつかせるのは、こうした信憑性があるとはいえない、あいまいな世間の言い伝えなのである。もう一つ、自分の目で見ることを妨げるものは、これまでも述べてきたように、突き上げてくる欲望である。

「貝の火意味をなさず、却って権勢の意を表す方向ならん」と賢治は原稿欄外に記しているが、実際最終的には、貝の火の意味は確定できないままに残されている。「権勢の意」といっても、ホモイたちの欲望を炎が美しく映し出すと確定できるわけでもないし、欲望が限度を超えると曇りを生じるとしても、その限度自体がわからない。読者をも巻き込むこのような評価基準のあいまいさ、わかりにくさこそが、貝の火の貝の火らしさであり、「貝の火」のおもしろさを生む原動力になっているのだろう。たとえば、同じ欲望を扱うにしても、「金のさかな」（プーシキン）ではことはもっと簡単だった。おじいさんは金の魚を釣り上げるが、その魚は自分を逃がしてくれればどんな望みでもかなえてくれるという。無欲で気のいいおじいさんは、願い事などなにも思いつかず、そのまま魚を海にかえしてやるが、欲深なおばあさんに言いくるめられ、願いを叶えてもらうことになる。一つ叶うとまた一つ、おばあさんの願い事は次から次へとエスカレートしてゆく。そして一つ願いが叶うとそのたびに、海の荒れ具合はよりひどくなる。最後は元の木阿弥で、得たものはすべて消えうせる。一方、賢治の「貝の火」では、限界が来るまでは、悪事も美しさと結びつく。いったいこれはなんだろう。美しさはぎりぎりまで拡大して行くのだ。そして最後は、元の木阿弥どころか、元の状態以下に転落し、貝の火の割れた破片でホモイは失明することになる。

「人はほんたうのいゝことが何だかを考へないでゐられないと思ひます」とは「学者アラムハラドの見た着物」のセララバアドの言葉だが、そもそも、何がほんとうによいことなのか、誰にも定かではない。なんでも知っているという顔をしているホモイの父親も、突き詰めていけば、「ほんたうのいゝこと」がどんなことなのか、わからなかった。だからこそ、貝の火は、善事と悪事を見分ける＜測定器＞として使われたのだ。しかし貝の火が見せるものがほんとうに美しいかどうか、その正しさを判断するのはホモイたちに他ならない。どこまでいっても、確かなものはない。

ホモイが狐といっしょにむぐらをいじめたあと、貝の火は美しくなる。「貝の火が今日位美しいことはまだありませんでした」と語り手は言う。その美しさは具体的には、「まるで赤や緑や青や様々な火が烈しく戦争をし

て、地雷火をかけたり、のろしを上げたり、又いなづまが閃いたり、光の血が流れたり」しているようだと言われているが、ここには何かしらぶきみなものがある。火の戦争、地雷火、のろし、いなづま、光の血……。その戦いのイメージからはなにやら、「金のさかな」の荒れ狂う海がかもしだす緊迫感にも通じるものがある。語り手はそれを美しいと見なすが、そのように感じるのを取りも直さず、彼がホモイたちの視点を共有しているからだろう。あるいは荒れる海も、見方によっては美しく感じられることもあるのかもしれない。

善と悪が競い合う。善いことをしなければ貝の火に傷がつくというのであれば、ホモイだって、否応なく、善に励むしか手はない。しかし、何が善なのかがわからなければ、どうなるのか。「なるほど祈禱といふものも悪いこともあるでせうな」。これは、小論のエピグラフにした賢治書簡の一節のすぐあとに記されている言葉である。自分のほんとうの「望みや願ひ」がどんなものやらわからないまま、祈ることは空しい。ただ祈ることが空虚であるだけならまだしも、知らないうちに、内なる邪悪な欲望に身を任せて祈っているのかもしれない。

盗んだものを食べてはいけないと息巻いていたホモイの父親は、自身の考えが貝の火の＜ご託宣＞と相容れないとなると、すぐさま自身の意見を曲げた。自分たちにはわからなくとも、至高の力の計らいならば致し方ないというわけだ。しかし、そのご託宣そのものがあやしい。ホモイの父親も＜世間知＞で鍛えられた他人志向、権威志向があればこそ、貝の火が見せるものをありがたいご託宣のように思い込んだだけかもしれない。しかも、ほんとうに貝の火に曇りが出た時には父親はどうしたか。あれほど貝の石が曇ることを悪事と結び付け、重大視していたにもかかわらず、いざ曇ってしまったとなると、今度は悪事と結び付けない。曇ったのには、ホモイの行動に何か原因があるのだと、父親は考えもしない。つまりは、彼が信じているのは、貝の火そのものではなかったということだ。これまで、悪事をするると曇るという＜貝の火＞をめぐる世間の噂（伝説）に従ってきたが、今度は、曇れば油に漬ければいいという、もう一つの＜貝の火＞をめぐる世間の噂に従う。世間に従うということ以外、父親の態度には

まったく一貫性がない。父親は大きく変わったに見えるが、そのじつ、その心性はまったく変わっていない。もちろん、父親も母親同様、ホモイをいとしく思っていることは疑いない（だからこそ、その時に応じて、＜世間の噂＞の中から、都合のいい方を選びとったのだろう）。しかし、その父親の愛が純粹であれば、貝の火が反応を示さなくても、せめてホモイがむぐらをいじめている段階で、＜良心に照らし合わせて＞、これは悪事だと断定し続けるべきではなかったか。

ホモイの父親の叱責の仕方も気にかかる。「お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きつと曇ってしまってるから」。「お前はもう駄目だ。玉をごらん。もうきつと砕けてるから」。「お前はもう駄目だぞ。今日こそ貝の火は砕けたぞ」。父親は、こうすればいいとは言わず、ただ駄目だ、駄目だと、繰り返すだけだ。どうやら父親が重要視するのはホモイの命運ではなく、自分の意見に対する貝の火の検証であるらしい。世間に対する自身の面目が保たれるかどうか、その不安が彼の頭を離れない。私には、父が愛していたのは、ホモイそのものではなく、一家に名誉をもたらす自分の＜息子＞であったように感じられる。

4.

角パンが盗んだものであることを知りながら、貝の火が禁止しないならよし、ということで、父親、ホモイ、母親がそれを平然と食べている。いったい食べるシーンの多いこと。冒頭でも触れたが、食べることは、この物語の一つのモチーフとなっている。

ホモイたちはもともと、白い草の根や青いばらの実、鈴蘭の実など、自然が生み出したものを、その日食べる分だけをとって食べていた。母親が「白い草の束をそろへて」食事の支度をしているシーンは、ずっと続いてきた食卓風景として実に印象的である。ところが、＜大将＞ホモイが栗鼠たちに、鈴蘭の実を集めさせた時には、食べきれない分量の実が集まった。それを見て、「こんなにたくさんの実を全体誰がたべるのだ」と父親は叱りつける。しかし、その後も貝の火は曇らない。それどころか、「一昨日の晩」より「もつともつと」赤く、「もつともつと」速く燃えている。であれば、

ということで、ホモイの両親は、無駄にしたいくないということだろう、翌日には食べきれないものを天日に干して保存することにする。伊藤眞一郎の指摘するように、これはまさに、「ホモイ一家の食卓風景の変化の発端」になる¹⁵⁾わけだが、興味深いのは、この「食卓風景の変化」が、自然の風景の変化と呼応しているということである。鈴蘭の「しゃりんしゃりん」と鳴る音を聞くとそれだけで、無邪気なホモイは「もう嬉しくて」、ぴょんぴょん草の上をかけだす(物語冒頭部)。しかし過剰に実をとられた鈴蘭は、「もう前のやうにしゃりんしゃりと葉を鳴ら」せない。これでは、ホモイたちも自然を満喫できず、心も浮き立たないだろう。大將ぶって過剰に鈴蘭の実を集めさせたホモイの行為は、ホモイたちを含みこんだ自然の調和の喪失を招いている。

保存食を使うようになった「食卓風景」は、さらに次の段階に移る。昼食のメニューの一つとして角パンが加わるのだ。さらに進むと、母親が夕食の支度を忘れるという事態になり、ホモイたちは、保存食の鈴蘭の実と狐の盗んだ角パンだけを食することになる。注目すべきは、その時点で貝の火が曇っているということを全員が知っているということだ。「まあ、ご飯の支度を忘れてみた。なんにもこさえてない。一昨日のすゞらんの実と今朝の角パンだけを喰べませうか」と母親が言うと、父親も、「うんそれでいゝさ」と、何かしらなげやりな態度で答える。これまで貝の火が曇らないかと心配していた父親が、曇ってしまった理由を詮索しないことと、このぞんざいな返事は深く関わっている。ひと言で言えば、一家の伝統的な食生活の崩壊は、一家が抛って立つ信念の崩壊と表裏をなしているのだ。

食事が自然食でなくなると同時に、盗んだものは食べないというこれまでの一家の原則も完全に失われる。これはホモイ一家において、これまで依拠してきた善悪を判断する道徳律が失われたことを意味する。貝の火を授かったその翌日にはまだ、「少しとうもろこしを盗んで参りませうか」という狐の申し出に対して、ホモイも、「いや、それは悪いことだ。そんなことをしてはならん」と、はっきりと答えることができた。むぐら問題でもことは変わらない。父に叱られた次の日は、「あいつは元来横着だから、川の中へでも追ひこんでやりませう」と狐から唆されても、<横着だったら、

川の中へ追い込んでもよからう>とは言わない。「むぐらは許しておやりよ」と抵抗する。さらには土の中のむぐらに、「むぐら、むぐら、むぐらもち。もうお前は許してあげるよ。泣かなくてもいいよ」と「高く」叫びもする。貝の火がむぐらを脅したことを<黙認した>にもかかわらず、父親の前日のきつい叱責がまだ効いているのだ¹⁰。しかしその翌日、狐から再び、むぐらをいじめようと唆されると、今度はずるずると承諾してしまう。前日に見せた首筋をつかむほどの父の怒りは、貝の火の二度目の<判断>のあとではもう、よみがえることはない。父親への信頼が失われるのと同時並行で、狐への依存度が増してゆく。その微妙な変化はもはや止まることはなく、最後には失明という大事件を招来することになる。

こう見てくると、狐も価値測定器なのだ。貝の火を信じるか、父を信じるか、狐を信じるか、自身（夢＝内なるもの）を信じるか。ここで扱われている問題は、信じるということそのものなのだ。

狐が、むぐらは毒虫だと言うと、ホモイは、なぜそうなのかと問い返すことはなく、その言葉を信じてしまう。盗みは悪いことだと言い切った毅然とした姿はもうここにはない。幼く無邪気だからしかたがないと、ホモイをかばう評者もいるかもしれない。しかしそんな甘さは賢治にはない。これはまさに、権威に迎合して生きているものの戯画である。相手が権威であれば、何を言っているのか、そんなことはお構いなしに、先入見を植えつけられてしまう。そして、権威者が入れ替わると、ころりと意見を変えるのだ。

一方、相手の心を転ばせる狐のやり口も見逃せない。狐は良心の痛みもなく、平気で幼いホモイをだます。狐には帰属する集団もない、信頼すべき<世間>のようなものもない。<正義>や<美>にこだわる連中をだますことなんて、狐にとっては赤子の手を捻るようなものだ。なにより、印象的なのは、ホモイがガラス箱に閉じこめられた四匹の鳥を助けようとした時の狐の言葉である。今までの丁寧な言葉遣いをがらりと変え、狐は素の顔に戻ってホモイをこう脅しつけた。「気をつけろ。その箱に手をかけて見ろ。食ひ殺すぞ。泥棒め」。自分こそそれつきとした泥棒のくせに、他人が自分の獲物に手をだそうとすると、「泥棒め」と脅しにかかる。狐にあって

は、この矛盾が矛盾ではない。彼は、何がよくて何が悪いのかにこだわらなくとも生きていける。邪魔者を排除するために殺害すらいとわないが、ただ、世間からの断罪だけは怖い。だから、世間の目をごまかすために、貝の火を授けられたホモイの＜ご威光＞を利用したのである。世間の認めるこのご威光があるかぎり、彼の身の安全は保障されている。

ただ、さすがの狐も欲望からは自由ではない。欲望はホモイにあつては主に権力欲として現れたが、狐においてはなにより食欲として現れる。狐が網で捕獲し箱に入れた鳥は「百疋ばかり」もあった。どれくらいの日数をかけて鳥たちを食べるのかはわからないが、その驚くべき捕獲数が、狐の食欲の現われであることにちがいなさう。また、ホモイの父親から決闘しろと迫られた時には狐はこう言った。「貴様ら三疋ばかり食ひ殺してやってもいゝが、俺もけがででもするとつまらないや。おれはもつといゝ食べ物があるんだ」。決闘を挑まれているにもかかわらず、平気で逃げる。逃げるのが卑怯だなどとはつゆ思わない。狐にとっては「いい食べ物」の確保がすべてに優先する。

ホモイの父親は狐とは違い、プリンシプルはあった。あったのだが、それが貝の火の判定と一致しないために、無効になりかけていた。貝の火が鉛ようになって、ホモイが泣きながら狐の「動物園」の「網」の話をするに至って、久々に父親の自信がよみがえる。子どもが親として自分を頼ってくると、消えかけていたかつての＜信念＞が戻ってくる。そこで、だからこんなことになるんだ、という遅ればせの説教をはじめののだが、これまでと少し、事情が違う。今回、鳥たちを見殺しにするという息子の不名誉な行為に関しては、自身の感じていた正義と貝の火が見せる＜判断＞が一致したのだ。息子にはやはり俺の力が必要なんだという、父としての自負の念が再度、湧きあがる。「ホモイ。お前は馬鹿だぞ。俺も馬鹿だった。お前はひばりの子供の命を助けてあの玉を貫ったのぢやないか。それをお前は一昨日なんか生れつきだなんて云ってゐた。さあ、野原へ行かう。狐がまだ網を張って居るかもしれない。お前はいのちがけで狐とたゝかふんだぞ。勿論おれも手伝ふ」。

ここで注意すべきは、父親の言葉の中に、鳥たちを助けよう、鳥たちの

命を救おうという純然たる思いがないことだ。彼には窮地に陥った息子しか見えない。ここでは「いのちがけで」戦うというイメージが重要視されているが、それは、きわめて戦略的である。いのちがけで戦っているホモイの姿を彼は改めて、貝の火という＜測定器＞にかけるつもりだったのだ。しかし実際は、自分だけが鼻息荒く前面に出て、ホモイは彼の背後で泣いているだけだった。「おれも手伝ふ」というが、「おれ」が前に出すぎて、ホモイは手伝いもできない。この高揚した父親の言葉を多くの評者は希望の言葉ととるが、私にはここに主題が凝縮されているとはとても思えない。

ホモイの父は失明したホモイを慰めて、「こんなこと」はどこにでもあると言うが、「こんなこと」という言葉で彼が何をイメージしていたのかはわからない。ただ貝の火が、次の日、戻ってきて、また美しい輝きを取り戻していれば……。そしてホモイの目もすぐさま治ってしまえば……。そうなればきっと、エネルギーな父親は懲りずに、その意味を得々と解釈してくれるにちがいない。「こんなこと」もよくあることなのだと。

ホモイの失明は、すでに述べたようにホモイが無意識部において見る内なる形と深く関わっている。内に目を向け続ければ、ホモイは二度と舞い上がることもなく、祭り上げられることもなくなるだろう。大正8年、賢治は、農村改善の指導者候補の県代表として選ばれた親友にこう書いている。「化石しては我々はもう進めなくなりますから化石しないでください。祭り上げられてはもうあなたの考へてゐることができなくなりますから祭りあがらないで下さい¹⁷⁾」。これは、他人の目を過敏に意識しすぎる自身への警告でもあったろう。おそらく賢治は祭り上がって「化石」になることを避けるために、＜失明＞と同種の負荷を自身にもかけようとしていたのではないか。

物語の最後では、父親の身ぶりがかかった言葉と対照的に、釣鐘草の朝の鐘が鳴り響く。「窓の外では霧が晴れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねそうは、「カン、カン、カッカエコカンコカンコカン」と朝の鐘を高く鳴らしました」。釣鐘草に関しては、途中にもこんな一節があった。「風が吹いて草の露がバラバラとこぼれます。つりがねさうが朝の鐘を／「カン、カン、カッカエコ、カンコカンコカン。」／と鳴らしてゐます」。「次の朝ホモ

イはまた野に出ました。／今日は陰気な霧がジメジメ降ってゐます。木も草もどっと黙り込みました。ぶなの木さへ葉をちらっとも動かしません。／ただあのつりがねさうの朝の鐘だけは高く高く空にひゞきました。／「カンカンカッカエコカンコカンカン。」／おしまひの音がカアンと向ふから戻って来ました」。

最後の場面では、霧が晴れて釣鐘草が鳴るが、だからといって、ホモイには、明るい未来が約束されていると結論づけることはできない。実際、釣鐘草は「陰気な霧」が降ってきた朝にも、鐘を鳴らしていたのだ。釣鐘草はどんな時でも鐘を鳴らしている。その響きは、チェーホフが描いたオレアンダの「海のざわめき」（『犬を連れた奥さん』）を想起させる。昔から鳴っており、今も鳴り、我々の死後にも鳴り続けるであろうその「海のざわめき」、その恒常性があるこそ、「地上の生の絶え間なき運動」が保障されているのだと、チェーホフは言う。

釣鐘草は、不吉な事件を予告したり、ホモイの心を励まそうとしたりするために、鐘を高く鳴らしているわけではない。釣鐘草は三度、鐘を鳴らしているが、どの場面もその音は変わらない。釣鐘草はただ朝が来ると、「カン、カン、カッカエコカンコカンカン」と高く鳴るだけだ。朝は始まりだ。地上の生活においてどんな不幸があろうと、繰り返し、始まりである朝が来る。賢治は「貝の火」の表紙に、「吉—吝—凶—悔」（悔は再び吉へと向かう）の循環図を書き記しているが、この、自然の反復を告げる釣鐘草の変わらぬ鐘の音の中に浸されることで、ホモイの悲惨な転落物語も、壮大な循環図の中の一齣となるのではないか。「化石」することのない、ホモイの新たな変化の可能性は、反復する鐘の音によって＜保障＞されているのである。

注

-
- 1) 下線は筆者。以下、下線、傍点による強調はすべて筆者のもの。
 - 2) このパンと餅は、「注文の多い料理店」の紳士たちが食べるはずであった西洋料理と、実際に二人が地元の案内人の猟師からもらって食べた団子の対照性を想起させる。
 - 3) 諸家によってその表現が違う。関口安義によれば、ひばりの子を助けたのは「アガ

ペーの愛」であるという（『賢治童話を読む』港の人、2008年、469頁）。小埜裕二は、ホモイがひばりの子の醜い容貌を知ったうえで、それでも飛び込めたかどうかかわからないとしながらも、「純粋な行為」であったと記している（『童話論 宮沢賢治 純化と浄化』蒼丘書林、2011年、273頁）。

- 4) たとえば、西村真由美「宮沢賢治『貝の火』論―父子の欲をめぐる―」『待兼山論叢』文学篇 39、2005年12月、24頁）を参照。西村は、「ホモイの＜無欲さ＞こそが、彼の＜献身＞の根源となっていた」と考え（同頁）、「貝の火」全体を、「無欲の子供」が「親という大人の欲によって心を変えていく物語」と読む（26頁）。
- 5) たとえば、父兎は、貝の火については「目がねをはづしてよく調べてから」、また、角パンについては、「眼鏡を外して、よくよく調べてから」、自分の考えを述べる。
- 6) 千葉一幹『宮沢賢治』ミネルヴァ書房、2014年、172頁を参照。
- 7) このような賢治と無意識の関係については、秦野一宏『宮沢賢治とは何か―子ども・無意識・再生』朝文社、2014年、243-246頁を参照されたい。
- 8) 「マгноリアの木」の諒安の見え「景色」と比較されたい。霧の底の陰しい山谷を歩いてゆくそのさびしい風景を、諒安は自分の中の「景色」とであると認めた。
- 9) 秋枝美保の指摘するように、「父親の立場を足元からすくうようなこと」をやつてのけるホモイの無邪気さは、「一つの破壊的な力であった」と言えるだろう（「宮沢賢治『貝の火』における父子の葛藤―歪んだ報恩譚の意味―」『近代文学試論』1992年、12月、40頁）。
- 10) 狐はこのようなホモイの父の変化を知っている。「いや昨日はびっくりしましたぜ。ホモイさんのお父さんも随分頑固ですな。しかしどうです。すぐご機嫌が直ったでせう」。狐は何でも知っている。あるいは盗品で誰かを手なずけて、貝の火の変化を監視させたり、ホモイ一家が角パンを食べて団欒するのを覗き見させたりしたのか（白いお餅を食べている栗鼠たちが、「てした」として使われている可能性もなくはない）。
- 11) 西村真由美「宮沢賢治『貝の火』論―父子の欲をめぐる―」、27頁。
- 12) 牛山恵「みちかい木ペン」『国文学 解釈と教材研究』學燈社、2003年2月、180頁。
- 13) 矢野智司『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』東京大学出版会、2008年、168頁。
- 14) 同上、169頁。
- 15) 伊藤眞一郎「宮沢賢治『よだかの星』試論」（『宮沢賢治・童話の宇宙』有精堂、1990年、所収）、28頁。
- 16) 平尾隆弘は、もしもホモイが父の倫理を受容したのなら、「悪いことをした」と謝らねばならないと言う（『宮沢賢治』国文社、1978年、70頁）。平尾はそうしなかった理由を、ホモイの心が「＜父＞と＜貝の火＞とのあいだを漂流している」ところに見い出しているが（同上）、それだけでは言葉が足りない。「許してあげる」という言葉は、大将として＜謝っている＞ことを示している。平尾にならって言えば、ホモイは＜自分自身＞と＜大将＞の間でも漂流しているのだ。
- 17) 大正8年8月20日前後の保阪嘉内宛書簡。保阪は拓殖大学で開かれた「第4回青年指導者講習」に、選ばれて参加した。

※賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない）。